〔書評〕

家近良樹著『幕末政治と倒幕運動』

松尾正人

近年、明治維新史研究がふたたび活発となった。明治維新史学会の論集が、平成四年（一九九二）の第一輯『幕藩権力と明治維新』の出版後、第二・三輯がつぎつぎに出版されていることがそれを示す。そのような近年の明治維新史研究において、とくに刺激的な労作を指摘するならば、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』（一九九五年、吉川弘文館）があげられる。

幕末政治史を取り上げた同書は、薩摩・長州両藩などの西南雄藩討幕派中心である従来の研究に対し、一橋慶喜・会津藩・桑名藩のいわゆる一会桑勢力に主眼を置いた研究として新鮮である。一会桑勢力のなかでもとりわけ会津藩を主体とした中央政局の分析は、本書において本格化されたといってよい。歯切れのよい記述で新たな視点をつぎつぎに提示した本書は、研究者はもとより明治維新史にはじめて取り組む者にとっても大いに役立つにちがいない。

それゆえ、このような本書の概要をはば広く紹介し、その成果を明治維新史研究の共通の財産とすることは、明治維新史を学ぶ者の責務と思われる。また、本書の問題点を指摘し、維新史研究のさらなる前進をはかるのも意義あることと考えられる。

一

本書の成果と問題点を論じる前提として、まずはじめに本書の立論の構成を簡単に紹介する。

本書は、幕末政治と倒幕運動の分析に主眼を置いているが、時期的には会津藩主松平容保の京都守護職就任から戊辰戦争における会津藩降伏までを取り扱い、それらを五段階に分けて論じている。すなわち、第一段階の慶応元年四・五月から翌二年八月上旬については、一橋・会津・桑名の一会桑権力の確立と同権力による朝廷掌握が進んだこと、それにともなう「反幕派」の主な打倒対象が、幕府とりわけ一会桑や朝廷内の関白二条斉敬・尹宮らに向けられた時期と位置づけた。また第二段階の慶応二年八月中旬から翌三年二月については、一会桑権力の分裂、一橋慶喜の将軍職就任、孝明天皇の急逝という新たな政治情勢が発生した時期と区分した。幕府と薩摩藩の間に協調関係が見られ、倒幕派の目標が不明確になったと評している。そして、第三段階の慶応三年三月から同年十月は、幕薩協調路線が破綻して、武力倒幕が現実の課題として浮上し、倒幕派の打倒目標が会津藩・尹宮に絞られた時期とみなした。第四段階の慶応三年十月から翌四年正月については、幕府の大政奉還後、倒幕派によって王政復古に難色を示す会津・桑名両勢力の京都追放が実施され、さらに幕府本体の打倒が具体化された時期と論じた。そして、最後の第五段階の慶応四年二月から同年九月は、松平容保の会津帰国とその後の会津藩の降伏によって、倒（討）幕が最終的に達成された時期と位置づけた。

以上が本書の立論の構成にともなう時期区分で、左がその章構成である。

序　章　倒幕に至る最終過程と分析視角
第一章　会津藩の中央政局への登場
第二章　一会桑権力の成立と確立――倒幕過程の第一段階――
第三章　御所諸門の警備問題と会津藩主導型警備体制の確立
第四章　一会桑権力の崩壊――倒幕過程の第二段階――
第五章　幕薩協調路線の破綻と倒幕運動の本格的進展――倒幕過程の第三段階――
第六章　倒幕の実現――倒幕過程の最終段階――
補　論　幕末期の朝廷に新設された国事審議機関

このような章構成で幕末政治過程を追究した本書の内容は、多彩な史料の引用ときわめて新鮮な分析視角の連続であるが、その概要を紙幅のゆるす範囲で各章ごとに紹介すると、以下のようになる。

まず、本書の分析視角を提示した序章に続く第一章は、幕末政局の中で会津藩が中央政局へ進出し、幕末政治の主役に登場した経緯を分析した。安政五年（一八五八）の日米修好通商条約調印以後の朝廷と幕府間の政治的変化、雄藩勢力の台頭、尊王攘夷運動の高揚といった新たな政治状況に対応した動向である。そこでは、主に文久二年閏八月の松平容保の京都守護職就任と、翌三年正月に新設された会津藩公用方（局）による藩政・朝廷掌握の実情を明らかにした。独自の構想を持たない会津藩の現状追認策、尊攘派との対抗関係の経緯をも指摘している。

第二章では、一会桑権力の「確立」を慶応元年（一八六五）四・五月段階とし、その「崩壊」を翌二年八月上旬として、この期間を倒幕過程の第一段階と規定した。同時期に一会桑三者は、条約勅許を勝ちとり、小笠原長行・板倉勝静の老中就任を成功させ、一方で一橋慶喜が「政務輔翼」、松平容保が「政事相談」、松平定敬が「政務参与」となり、一会桑権力がその絶頂期をむかえたという。そして、一会桑の中核が容保と会津藩公用方であったことから、会津藩が朝廷と幕府両者の結合の媒介としての役割をはたしたと評した。それゆえ、一会桑権力による朝廷掌握に対し、反幕府派の打倒対象が一会桑とこれを支援する二条関白・尹宮らに向けられたと論じた。

また第三章は、開国を求める諸列強の外圧のなかで、京都防衛が重要な課題として登場することに視点を置き、御所諸門の警備問題を取り上げ、それを朝政（国政）の主導権問題とあわせて分析した。京都所司代の御所警備に対して、諸藩の割り込み要求が強まり、京都における幕府側の警備主導権確保のために設置した機関が、京都守護職であったと論じている。その結果、京都警備の実権が守護職・所司代に移行し、それが逆に一会桑に対する反幕派の強い反発をまねいたという。御所諸門の警備担当問題が重要な政治課題となり、最終的には倒幕を決行するための不可欠な前提として、倒幕派内で真剣に議論されるようになったと論じたのである。

第四章は、慶応二年（一八六六）七月の将軍家茂の死後、将軍職を固辞した一橋慶喜が八月に第二次長州征伐の名代出陣を中止し、土佐・薩摩藩などの上京を勧誘したことで、慶喜と会津藩との対立が決定的になったと論じた。九月に朝廷内の二条関白や尹宮らの参朝停止と相まって、いわゆる「中央政局の真空状態」が生れたと評している。

十月の小笠原長行の老中罷免、容保の守護職辞任申請によって、一会桑が完全に瓦解したとし、一会桑権力の「崩壊」の時期を慶応二年八月上旬と規定した。そして十二月の慶喜の将軍職就任、孝明天皇の死去という新たな政治状況のなかで、幕府と薩摩藩の協調路線が見られたことを論じ、そのことによって、反幕派の打倒対象が特定化できなくなったという新たな論点を提示した。

第五章は、まず幕府が列強の圧力によって兵庫開港を受け入れ、独断で勅許奏請を行ったことによって、それまでの幕薩協調路線が破綻したと述べた。議奏・伝奏の人事などで幕府と薩摩藩の対立が深刻化し、さらに幕府が長州藩の寛大な処分と兵庫開港の同時勅許を勝ちとったことから、幕府と薩摩藩の対立が決定的になったという経緯である。そして慶応三年五月段階で、武力倒幕が現実の課題として浮上したと論じた。同年六月の薩土盟約の締結は、武力倒幕のための名目づくりの方策とみなし、また武力倒幕派が「討幕の密勅」の獲得を進めたが、慶喜が大政奉還を奏上したことから、武力倒幕も空振りになったと評した。倒幕運動のたかまりにともなって、それらに対抗する尹宮・会津藩勢力が再浮上し、以後、土佐藩は公議政体路線をとり、一方の薩摩藩は打倒対象を会津藩に特定するに至ったと論じている。

第六章では、大久保利通・西郷隆盛らが企図した「討幕の密勅」が、慶応三年十月十四日の大政奉還によって画餅に帰し、武力倒幕派の打倒対象が、王政復古に異を唱える会津・桑名両藩に絞り込まれたことを論じた。その上で、大久保・西郷らによる十二月九日の王政復古クーデターを、「討幕」を目的とした武力発動ではなく、会津・桑名の「両藩をたたき潰すことで佐幕派勢力に壊滅的な打撃」をあたえ、そのあとの王政復古を進行させるための「ショック療法」であったと位置づけた。クーデターは、薩摩藩を中心とする「王政復古派」が、会桑両藩が警備する唐門・清所門・蛤門を接収した時点で成功したと評した。

また、クーデターで成立した中央政府については、公議政体派（土佐藩）と武力倒幕派（薩摩藩等）との間に成立しつつあった妥協点が、小御所会議で崩壊し、慶喜を打倒する線へ逆もどりしたことを指摘した。そして、その慶喜を議定職に任じようとする動きが強まるなかで、大久保利通がはじめて徳川氏本体の打倒を考えたと論じている。その理由を、徳川氏および会桑両藩を含む雄藩連合政権が成

立し、王政復古クーデターが、旧来の封建支配体制の修正・再編にとどまる危険性が出てきたためであると位置づけた。ついで鳥羽・伏見の戦で旧幕府側が敗北した結果、公議政体派は勢力を失墜し、武力倒幕派の指導権が確立して、天皇を政治的主体とする新国家建設への方向がいっきに切りひらかれたと論じた。さらに戊辰戦争については、新政府軍による若松城攻撃と会津藩の降伏を重視し、その結果、武力倒幕派の攻撃目標が最終的に打倒され、倒幕運動が終了したと結論づけている。

以上が六章にわたる本文であるが、本書には補論が附されており、幕末に朝廷内に新設された国事審議機関、具体的には文久二年に設置された国事御用掛と翌年の国事参政・国事寄人について考察がある。そこでは、国事審議機関によって公家が国事討議に参加できるようになり、「朝権」の進出上、画期的な意義をもったことが論じられた。

三

では、このような幕末政治運動、とりわけ松平容保の京都守護職就任から戊辰戦争での会津藩降伏までを考察した本書の成果は、どのような点に顕著なのであろうか。ここでは、とりあえず以下の六点に絞って述べてみたい。

まず本書の第一の成果は、これまで十分に考察されていなかった一会桑権力について、その性格と構造を分析し、独自性を改めて論述した点である。

すなわち、従来の研究が一会桑三者の動向と幕府側のそれを一括して考えてきた傾向が強いのに対し、当該期の政治構造が朝廷・幕府・諸藩の三者構造では論じ切れないことを指摘し、幕府と一会桑権力を区別して論じた。会津藩の役割と活動をクローズアップさせ、そのことから幕府に対する一会桑権力の独自性を強調したのである。一会桑権力に対する幕府老中の不信・反発などについては、これまで十分な実証がないままに論じられてきただけに、本書の丹念な分析は大変に説得力に富む成果となっている。

また第二の成果は、文久三年正月に設置された会津藩の公用方を分析し、その上に立って一会桑権力内における会津藩の役割を論証した点である。

本書は、公用方の中心となった小森久太郎・外島機兵衛・野村左兵衛・秋月悌次郎・広沢安任らの動向を詳しく究明し、かれらが集団で京都守護職松平容保を補佐したことを分析している。公用方が京都本陣や朝廷内での重要な

位置を占めていたことの指摘は的確で、本書の「幕末の中央政局は、会津藩公用方の存在を無視しては語れなくなる」という記述は、説得力に富む。従来は『会津戊辰戦史』や星亮一『松平容保とその時代』（歴史春秋社）で簡単にふれられている程度であったので、本書による詳しい考察は高く評価してよい。この点、一会桑権力についても、本書はこれまで一橋慶喜が中心に論述されてきたことを批判し、公用方を背景とした会津藩の役割を強調した。同藩が幕府から京都守護職に任じられ、さらに朝幕間の結合の媒介体としての役割、諸藩の国政参加を阻止する役割をはたしていたことからも、同藩の位置が無視できないと論じている。この一会桑権力内における会津藩の役割を重視する本書の指摘は、一橋慶喜が江戸の幕府・諸役人の嫉妬・反感を買っていたことの指摘とあいまって、大変に注目してよい成果と思われる。

さらに第三の成果は、一会桑権力の「成立」と「崩壊」の時期区分に、新たな視点を提示したことである。

従来、一会桑権力の「成立」については、慶喜の禁裏御守衛総督就任に続いて、元治元年（一八六四）四月に松平容保が京都守護職に再任され、松平定敬が京都所司代に任じられた時期とみなされてきた。だが、本書はそれに疑問を示し、元治元年七月の禁門の変以降と論じている。それは、禁門の変に勝利した慶喜が強硬論に転じ、一会桑による皇居・公家地の警備の進展、および慶喜が会津藩に歩調を合わせるようになったことに着目している。一会桑の権力としての一体性を重視した本書の「成立」論は、権力の実態にもとづく説得力のある視点と思われる。そして本書は、一会桑による朝廷掌握が達成され、朝幕間の媒介体としての役割をはたすようになった慶応元年春ごろを、一会桑権力の「確立」期と位置づけた。

また本書は、一会桑の「崩壊」の時期についても、従来のように慶喜の将軍職就任にともなう一桑と会津の分裂時とするのではなく、もう少し早い慶応二年八月と論じた。八月の慶喜の長州征伐出陣中止とその後の九州諸藩の解兵問題を重視し、それが慶喜に対する会津藩と尹宮の反発となり、十月の容保の京都守護職辞職申請に結びつくと指摘している。いずれも会津藩の動向を重視した時期区分論であり、一会桑内の会津藩の役割を高く評価したことにもとづく具体的な視点といえる。

第四の成果は、京都御所諸門の警備問題を取り上げて詳

細に分析し、それを朝政（国政）の主導権掌握問題とあわせて検討するという斬新な方法論を設定し、その考察に成功している点である。

ここでは、開港後の京都御所警備の危機に対し、諸藩が割り込みをはかるようになったことに視点をあてている。その対抗策が幕府による京都守護職の設置であったという。そして禁門の変後、京都守護職・所司代の京都御所警備の掌握が、一会桑権力を支えるものになったと論じている。これらの一会桑による御所警備の経緯と、それが反幕派の反発となったことの考察は、大変に興味ぶかく有意義である。

第五の成果は、国事審議機関についての具体的な分析を行い、とくに国事御用掛の設置を、尹宮が中心となって上級公家主導型の体制を作ったものと位置づけた点である。

そこでは国事御用掛の設置を尊攘派の進出に結びつける従来の見解に疑問を提示し、むしろ石井孝氏の指摘を発展させている。国事御用掛を上級公家主導型の国事審議機関とみなし、それに対抗する尊攘派の要求が国事参政と国事寄人の設置となり、そのもとで「激派堂上」と尊攘派による新たな権力主体が形成されたと評した。そして彼らの強硬路線が薩摩藩をはじめとする公武合体派や上層公家の反発をまねき、文久政変になったと論じている。この結果として、国事参政と国事寄人が廃されて国事御用掛のみが存続したこと、それが公武合体派の上級公家中心の国事審議機関としての性格を強めたことの指摘は、大変に有効と思われる。

最後に第六の成果としては、幕末会津藩の政治運動、とりわけ公用方を中心とした活動を、『会津藩庁記録』や「会津藩文書」（『史籍雑纂』）などを用いて精力的に論述した点である。これまでの会津藩研究は、京都を中心とした動向についての考察が少なく、それも『京都守護職始末』『七年史』に依拠することが多かった。それだけに、本書が『会津藩庁記録』、あるいは会津藩士武藤左源太の『誓徴録』などの会津藩関係の基本史料、桑名藩関係の諸史料をはば広く活用した意義は大きい。幕末政治史とりわけ会津藩研究に、史料面での新たな分野を切り開いた成果と評価してよい。

四

ところで、顕著な成果を六点に限って述べたが、本書の

残された課題を指摘するならば、どのようになるであろうか。とりあえず、気のついた問題点をあげると、以下の指摘ができるように思われる。

まず第一の問題点としては、本書が会津藩の動向に注目した結果、慶応四年十二月九日の王政復古クーデターの評価が会津藩中心となり、視野が狭くなっている点である。

本書では、王政復古クーデターについて、「討幕を目的」としたものではなかったとし、「現状肯定的な馴れ合い」を粉砕するためのクーデター方式の「ショック療法」であったと論じている。同時に、会津・桑名両藩を挑発してたたき潰すことが目的であったと位置づけた。だが、王政復古クーデターの目的が、本書の論じるように、はたして会津・桑名両藩を挑発・打倒することにあったのであろうか。もしそうであるとするならば、慶応三年十月の「討幕の密勅」などは本来作られる必要もないし、「会桑両藩の討伐」の沙汰書だけでよかったように思われる。さらに、「ショック療法」や会津・桑名両藩の排除の目的だけで、軍事的な行動をともなった王政復古クーデターをおこなったのであろうか。王政復古の流れが出来つつあったとはいえ、クーデターとともに王政復古の大号令を発令し、幕府・摂政・関白といった武家・公家の廃止や神武創業にもとづくことを明記した理由は、決して小さくないように思われる。たしかに薩摩藩が会津藩打倒を念頭に置いていたことは事実であるが、この段階ではすでに「倒会津」ではなく、種々の妥協を予定しながらも、「討幕」を含めた「倒幕」が本来の目的となっており、それゆえに「密勅」やクーデターが断行されたのではなかろうか。

第二の本書の問題点は、新政権の成立後の小御所会議について、守護職・所司代の免職問題が辞官納地問題とともに重要な目的であったのに、「事情をよく飲み込めていなかった」山内容堂がクーデターを非難し、慶喜を評議の席に加えるように主張したことで、慶喜の辞官納地問題に討議が集中してしまったと論じている点である。

右のように評価するならば、会議の半ばで慶喜による会津・桑名罷免が判明したにもかかわらず、その後も辞官納地をめぐる議論が、新政府と慶喜側との間で延々と継続されたことを、どのように理解したらよいのであろうか。守護職・所司代の廃止は、すでにクーデターの際の大号令で発表されていた既定のことである。逆に辞官納地問題は、たとえその方向が生れていたとしても、なお小御所会議で

の審議・決定が必要であったように思う。それゆえに辞官納地問題が、発足したばかりの新政府の基盤強化に欠かせないことであり、やはり最大の課題であったのではなかろうか。

さらに第三の問題点は、慶応三年の幕府と薩摩藩の協調路線についての評価である。

当該期にはたしかに幕府と薩摩藩側との歩みよりがみられたことも事実であるが、それを本書のように大きく評価するとすれば、史料的な裏づけがさらに望まれるように思われる。本書の指摘する幕薩協調路線の前年の一月、すでに「薩長盟約」が結ばれていたことはよく知られている。「薩長盟約」には、本書でも指摘されているように「橋会桑」の糾弾を明記しているが、やはり全体的には薩摩と長州の提携を約し、幕府への対抗策が中心である。「薩長盟約」ですでにこのような方向を打ち出していた以上は、それと矛盾する幕薩間の協調も、ある種の妥協的措置といった要素が無視できないのではなかろうか。「薩長盟約」後の段階において、本書のように薩摩藩が幕薩協調路線に転じたと位置づけるには、同藩の全体的な動向に着目したより実態的な考察が重要なように思う。

第四の問題点は、会津藩の藩論形成や一会桑権力の実態について、より深い考察と史料収集が望まれる点である。

会津藩については、京都と江戸および会津の国元の関係、あるいは御所警備にあたった藩兵や軍事力のあり方などはどのようであったのだろうか。一会桑権力の実態、会津藩に比較した一橋家の全体的動向や京都所司代であった桑名藩の実態はいかなるものであったのだろうか。この点は、本書でも可能なかぎり追求しようとしたことと思われるが、やはり今後の長期的視野に立った史料収集とその分析が望まれる。「大日本維新史料稿本」や「一橋家文書」の活用、あるいは当該期の諸藩の藩庁文書などのはばひろい調査が、今後とも求められるように思われる。

五

本書は、著者が膨大な幕末史料に十数年かけて取り組み、重要な事項を一日単位で書き写し、それを斬新な視角から分析・考察した貴重な労作である。膨大な幕末史料は、これまで等閑にされていたものも多く、それらをはば広く活用した著者の労苦は、まことに敬服に値する。

本書の課題として、気が付いたままに疑問を書き並ばせ

ていただいたが、生半可な理解にもとづく的外れな記述が多いかと思う。いずれも蛇足のたぐいで、決して本書の価値がそこなわれるわけではない。

本書の全体を通して改めて痛感させられることは、従来の西南雄藩を中心とした討幕派研究に対し、一会桑権力の分析から逆照射するという新たな視角によって、幕末政治史を再構成した本書の意義の大きさである。また、通説に対して常に疑問を投げかけ、新たな鋭い指摘を提示していることの新鮮さである。本書の随所に示された精力的な分析成果と、積極果敢なチャレンジ精神に富んだ考察は、後学の明治維新史研究者の大きな刺激となるにちがいない。

家近良樹著『幕末政治と倒幕運動』、吉川弘文館、一九九五年刊、A5判、三一三頁、本体六二〇〇円

（まつお　まさひと・中央大学教授）